

Title	強調のための有声子音延伸について
Author(s)	金子, 理紗
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 57-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53327
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

強調のための有声子音延伸について

金子 理紗

要旨 音長延伸による強調表現において、有声子音の重子音化がどの程度強調として認められるか、音声の聴取実験を行なって調査した。その結果、単語間での容認度の差はみられるものの、有声阻害音および共鳴音の延伸を含む発話を、過半数が「強調」と感じると評定した。共鳴音の音長延伸についてはさらに、 $?C \leq CC$ の割合でどちらも「強調」と認められることが確認された。

1 はじめに

日本語には重子音と単子音の区別があるが、有声の子音は重子音化しないといわれる (Itô and Mester 1995 ; Kubozono et al. 2009)。Kubozono et al. (2009) では、「ただ」の強調形が「たっだ」ではなく「たった」であることを、その象徴として挙げている。しかし、「たった」と違い、語彙化されていない強調表現においては、「すごい」[sugoi]に対する[suggoi]のように、有声子音が引き延ばされて有声の重子音が現れることがある。また、有声阻害音だけでなく、共鳴音も強調によって重子音化する場合があります。たとえば Kawahara (2015) は接近音の重子音を含む、「こわい」[kowai]が[kowwai]となる例を挙げている。金子 (2013) は、音声ではなく文字での表現だが、「うっるさい」や「かわわいい」といった表現がインターネット上で広く見られることを報告している。

このように、強調表現における有声の重子音の存在は、少ない単語例とともに指摘されているが、強調表現としてどのくらい認められているかは分かっていない。また、音声を用いた調査もほとんど行なわれていない。そこで本稿は、有声子音の延伸による強調表現がどの程度容認されているか、発話サンプルを使った聴取実験の結果から分析することを目的とする。まだ調査途中であるが、実験結果からある程度一定の傾向が観察されたため、ここに報告することとする。

2 実験方法

2.1 サンプル

3~5モーラの形容詞で、日常的に使われている語のうち38語を対象とした。強調で延伸される第2モーラの頭子音の種類に偏りがないように、子音ごとに3語ずつ (/h/は適当な語が足りず1語のみ) と、延伸する子音がない場合でも、無音部の音長が引き延ばされる可能性を想定し、第2モーラに頭子音のない1語が選ばれた(1)。

(1) /t/ : きつい、きたない、おとなしい	/k/ : たかい、あかるい、たくましい
/s/ : おそい、やさしい、おそろしい	/h/ : あほらしい
/b/ : やばい、あぶない、すばらしい	/d/ : ひどい、めでたい、くだらない ¹
/g/ :すごい、ながい、はげしい	/z/ : うざい、まずい、めずらしい
/m/ : あまい、さみしい、おもしろい	/n/ : かなしい、たのしい、たのもしい
/r/ : からい、うるさい、ありがたい	/j/ : かゆい、つよい、くやしい
/w/ : よわい、かわいい、やわらかい	/V/ : あおい

それぞれ第2モーラの頭子音部分の音長を、1モーラ分程度引き延ばして発話したものを録音し、実験用の音声を作成した。発話は東京方言話者である筆者が自ら行なった。子音部音長の変化以外で強調が知覚されるのを避けるため、なるべく同じ強さ、同じピッチレベル、同じ発話速度で発話した。母音以外の共鳴音の延伸については、共鳴音の前に声門閉鎖音が加えられるパターンと、共鳴音が長音化するパターンの2種を作成した。例えば「よわい」であれば、[joʔwai]と[jowwai]の2種を作成した。

2.2 回答者と回答方法

23歳から30歳の東京方言話者17名（女性15名、男性2名）を対象に、質問紙調査を行った。質問紙はGoogleフォームを用いて作成し、YouTube動画として貼り付けたサンプルの音声を聞いてもらった。各音声の再生回数は制限しなかった。また、各音声には元となった語（例えば「すごい（凄い）」）のみ文字で示し、音声に対応する文字表記（例えば[suggoi]に対して「すっごい」など）はつけずに聴覚印象のみで判断してもらった。各音声を聞き、強調と感じるかどうかを4段階（強調していると感じる・どちらかという強調していると感じる・どちらかという強調しているとは感じない・強調しているとは感じない）で評定してもらった。今回「強調」の定義はせず、回答者に判断を任せた。

3 結果と分析

3.1 有声阻害音の延伸

阻害音が引き延ばされた発話に対し、「強調していると感じる」または「どちらかという強調していると感じる」が選ばれた割合は、図1のようになった。「めでたい」「ながい」「はげしい」での割合が52.94%、58.82%、58.82%と他の語に比べて低いものの、いずれの発話も「強調」と認められる割合が過半数に達している。この結果から、強調のための音長延伸では、一般的には有標である有声阻害音の重子音が容認されていると考えられ

¹ 連語だが形容詞的に使われるため調査語に入れた

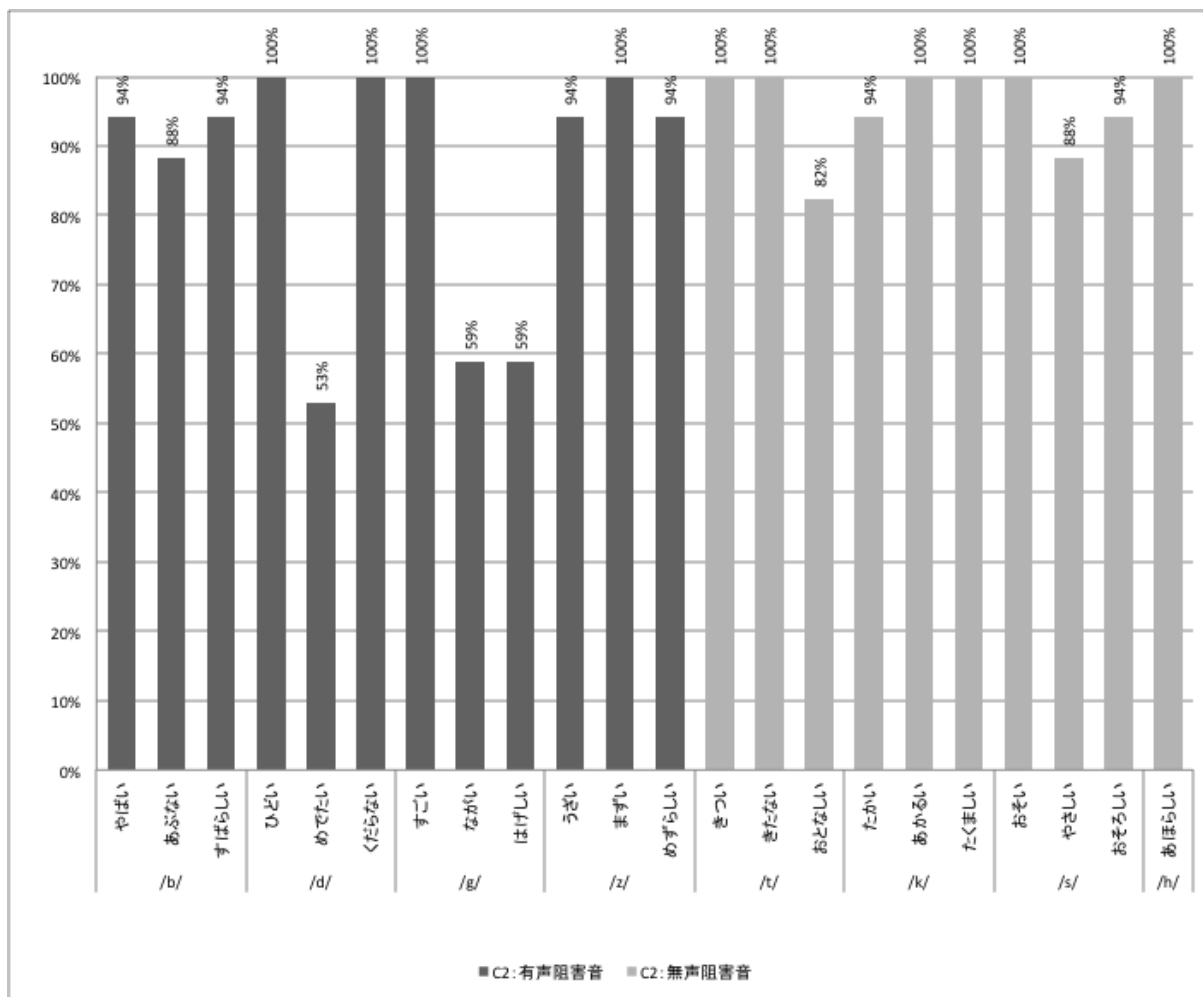


図1 阻害音の延伸による強調の容認度

る。ただし、阻害音が無声の場合と比較すると、やはり全体としては容認度が下がるようである。しかしながら、第2モーラ頭子音が無声の「おとなしい」「たかい」「やさしい」「おそろしい」で、阻害音延伸が「強調」とされる割合が100%に満たないのに対し、第2モーラ頭子音が有聲の「ひどい」「くだらない」「すごい」「まずい」では、阻害音延伸が100%「強調」と評価されているのは興味深い。

3.2 共鳴音の延伸

共鳴音が引き延ばされた発話に対し、「強調していると感じる」または「どちらかという」と強調していると感じる」が選ばれた割合は、図2のようになった。図中の?Cは共鳴音の前に声門閉鎖音が見れる発話を、CCは共鳴音が長子音(重子音)化する発話を意味する。

まず、共鳴音の延伸の場合も、「強調」と認められる割合がどの音でも半数を超える結果となった。第2モーラに頭子音をもたない「あおい」であっても、[a?oi]という言い方を「強

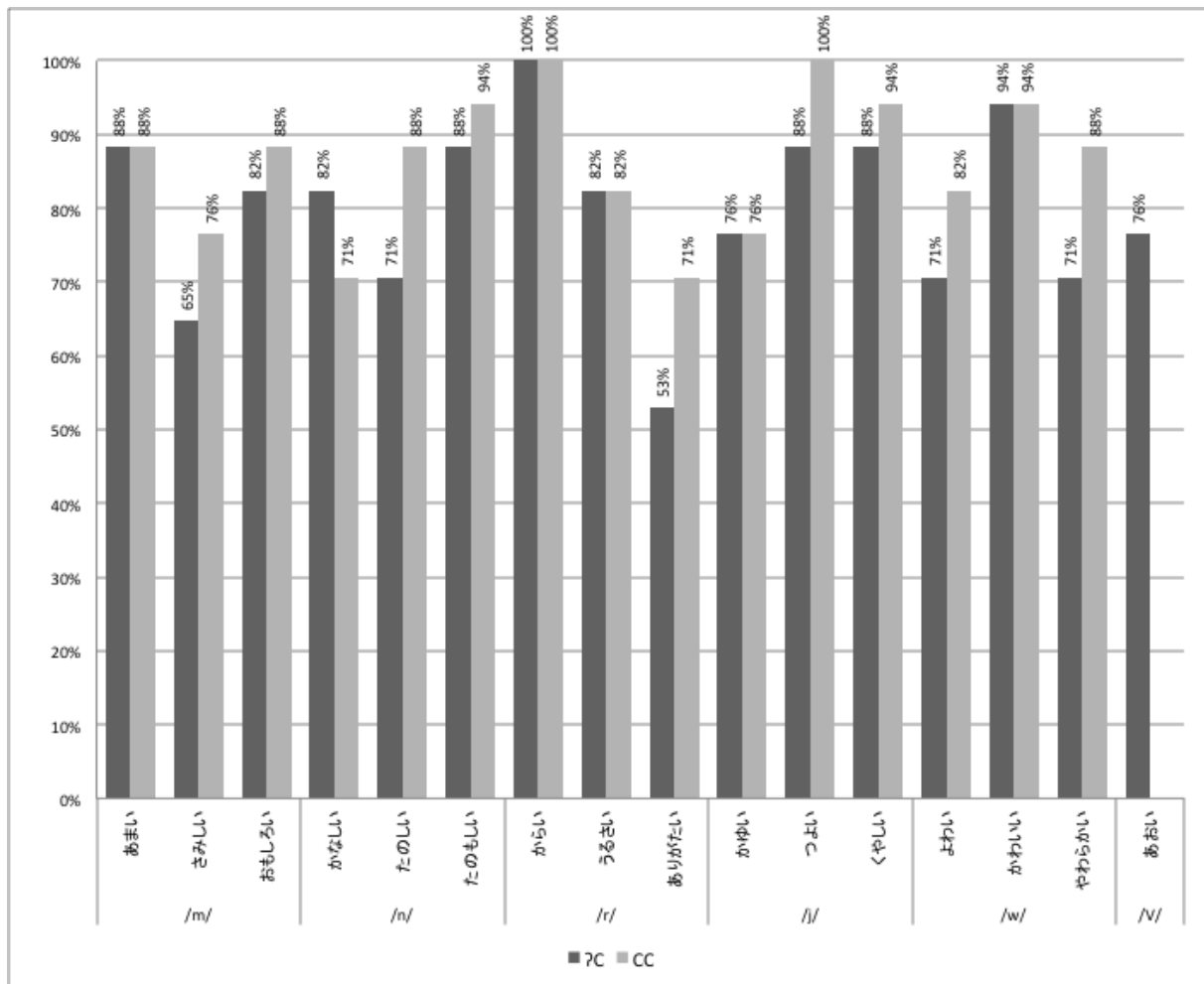


図2 共鳴音の延伸による強調の容認度

調」と評定する割合は76.47%と高かった。次に、?CとCCを比較すると、「かなしい」とCCのパターンのない「あおい」を除き、CCのパターンの発話のほうが?Cのパターンよりも、「強調」とみなされる割合が高いか同等であった。「かなしい」の場合のみ、?Cが82%、CCが71%と、?Cのパターンのほうが割合が高かった。この結果から、一般的には忌避される共鳴音の重子音が、音長の引き延ばしによる強調表現においては、程度の差こそあれ認められているといえる。

4 まとめ

強調のための有声子音の引き延ばしについて聴取実験を行ない、その容認度を調査した。結論として、一般的には忌避される有声の重子音が、障害音・共鳴音ともに、強調表現としては認められる割合が高いことが確認された。

引用文献

- Itô, Junko and Armin Mester (1995) Japanese phonology. In *The handbook of phonological theory*, ed. John Goldsmith, 817–838. Oxford: Blackwell.
- 金子理紗 (2013) 「イ形容詞の強調における特殊モーラの挿入位置」『音声言語の研究7』(大阪大学大学院言語文化研究科), 29-34.
- Kawahara, Shigeto (2015) The phonetics of sokuon, obstruent geminates. In *The Handbook of Japanese Language and Linguistics: Phonetics and Phonology*, ed. Haruo Kubozono, 43-73. Mouton.
- Kubozono, Haruo, Junko Itô, and Armin Mester (2009) Consonant gemination in Japanese loanword phonology. In *Current issues in unity and diversity of languages. Collection of papers selected from the 18th International Congress of Linguists*, ed. The Linguistic Society of Korea, 953–973. Republic of Korea: Dongam Publishing Co.